特集座談会
「今、地域に求められる生涯学習とは」

参加者
秋田　　清（別府大学文学部人間関係学科教授）
大嶋美登子（別府大学文学部人間関係学科教授）
篠藤　明徳（別府大学文学部人間関係学科教授）
瀬戸口昌也（別府大学文学部人間関係学科助教授）
企　画
松田　美香（別府大学文学部国文科助教授）

生涯教育と生涯学習

秋田　昔は生涯教育と言っていたのを生涯学習と言うようになったのは、「自分から進んで勉強することに意義がある」って、そういう話でしょう。

瀬戸口　ええ。

秋田　逆に大学の教員とか指導している人間の責任がかえって曖昧になるから、やっぱり生涯教育という言葉をなくしてしまうのはいかんという意見も、一方であって。

瀬戸口　言葉の歴史から言うと、戦後まず「社会教育」があって、次に「生涯教育」と言われ、最後に「生涯学習」と言われるようになりました。社会教育というのは、戦後、行政が主体になって、公民館などを基盤に行ってきたものです。ところが世界的な流れの中で、リカレント教育や学校教育も含めて、人の一生の中で教育を考えようという傾向となり、だったら社会教育も生涯教育という枠の中で捉えなおそうと言われ始めた。それが1970年代くらいですかね。

松田　リカレント教育とは。

瀬戸口　社会に出ても、もう一度いろいろな形で、教育を受けるチャンスを提供することです。社会人に対して必要な教育機会を与え、また職場に戻す。そういう機会を導入しながら、一生を通じて教育の機会を提供していくべきだというのが、生涯教育の考え方です。ところが1980年代に、臨時教育審議会が「生涯教育」ではなくて「生涯学習」だという言い方をしだした。結局、学習者の主体的な意思に任されているわけだから、教育する側ではなく教育を受ける側を中心に考えようということで、「生涯学習」と言われるようになったようですね。厳密な区別は難しいと思いますが、この3種の言葉が機会に応じて使い分けられているのが現状です。だから「生涯学習」と言っても、政策的な意味合いが強いのではないのでしょうか。

松田　生涯教育の中に大学での教育もすべて入っているのでしょうか。

瀬戸口　それも世界各国においてかなり違うようで、日本の場合は大学が生涯教育の機会を提供することが非常に少ないようですね。ドイツではだいぶ違うみたいですよね。

大嶋　ドイツの場合、リカレントみたいなことはないんですか。北欧に行ったときに受けたレ

クチャーでは、働くことと学ぶことは一体という感じを受けましたね。国民学校というような名前で、ホームヘルパーをしていた人が半年休んで、また学んで少しステップ・アップしたり…。

篠藤　ドイツの場合は、三つに分かれますね。一つは社会人のための「成人教育機関（国民高等教育）」で、外国語やコンピュータ学習などカルチャー・スクールのような講座が、公費補助があるのでかなり安く受講できます。それから、大学ではアビトゥアー（高校卒業資格）を取っていれば（以前は無料）、再び登録すれば何歳になっても勉強はできます。一方の職業訓練の場合は、商工会議所とか手工業組合が教育の主体的権限を持っているから、資格との関係で、文部科学省や大学やカルチャー・センターとは違う独自の体系の教育をしている。ドイツでは生涯教育を考える場合、この３つを考える必要があります。

瀬戸口　日本には、「成人教育機関」にあたるものが無い。日本の高等教育機関がそういう教育を担当することはほとんどなくて、主に担当するのは行政か、または日本に特徴的な「カルチャー・センター」です。そういう意味では、日本では大学が生涯教育機関としては、まだまだだということです。

松田　職業を持っていて他に専らすることがある人が受ける教育が生涯教育で、大学でずっと勉強できる人は大学生というようにも聞こえますが。

瀬戸口　というか、外国では職業人の教育や再教育の意味合いが強いんじゃないでしょうか。日本の場合、社会教育にしても、公民館があらかじめ講座を組んで、はいどうぞって用意しているから、受講者のニーズと噛み合わないこともあったようです。それで、カルチャー・センターと公民館を比べてどちらがいいかなんてことも言われたりしました。今は、双方が相互乗り入れしているところもあるようで、事情が違ってきているようです。

秋田　生涯学習社会という言葉にはいくつかの要素がある。ひとつはリカレント教育。企業の技術開発の進展の中で新しい技術に対応できない人たちを辞めさせた場合、訓練を受けてもらってどこかへ再就職させなきゃならない。もう一つは高齢化社会において、高齢者にどうやって毎日の張りを与えるか、見方を変えれば、高齢者を国家の下に統合しようというもの。最後は大学に関することで、18歳人口がどんどん減ってきて、教育市場の問題として考えている。そういう要素があって、生涯教育とか生涯学習社会とかいう言葉が出てきたんだけど、でも、さっきも出たけれどあんまり中身の問題が考えられていないような気がするんだけどね。生涯学習の中に、学校教育を含める時と含めない時があると聞いたこともあるが、それに何か意味があるのかな。

瀬戸口　その辺は人によっていろいろのようです。結局、昔から言われてきたのは、「学校教育と社会教育の連携」なんですよね。それを括る

ものとして「生涯教育」という言葉が出てきて、学ぶ側からの視点で見れば、「生涯学習」なんだというのが私の理解です。

秋田　だから、それ自体にそんなに大きな意味は無い。教育、教育と言っているけれども、何を教育するのか、何を学ぶかが問題とされていない。

大嶋　戦前だったら、お国のためにあるいは地域の団結を深めるようなという目的があったと思いますが、1980年代以降、臨教審が言い出してからは中身がはっきりしないまま、いろいろな教育の場で生涯学習ということが言われてきたという気がしますね。

秋田　ま、便利な言葉だね。

篠藤　ひとつの整理をしますと、人は何かを学びたいと思っています。なぜ学びたいかというと、労働市場で自分の価値を高めるためというのもあるでしょうが、ケーキが大好物だというような意味で学ぶこと自体が楽しいんだという場合もあるのではないでしょうか。後者の好みの問題に国家がどう関わりを持つかをもっと考えるべきではないでしょうか。生涯学習という名で、こうした個人の領域に国家が関わることに違和感というか反発がありますね。

瀬戸口　ある人が主体的に資格取得でも、英会話でも、乗馬でも、テニスでも、何でもやり始めたらそれは生涯学習と言えます。しかし、その人は「自分は生涯学習をしている」という意識はあまりないのではないでしょうか。一方で、そのような機会を、いかに効率良く低コストで提供していくかが生涯教育側の課題となるのですが…。

篠藤　提供していくというのは、国家がってことですよね。

瀬戸口　国家とは限らないわけです。先ほどの例で言えば、昔は一方でカルチャー・センターの講座があって、他方に公民館の講座があって、顧客の取り合いみたいなことがありました。それだったら、効率が悪いし利用者も混乱するだろうから、両者がうまく連携して、整理できる所を整理していったわけですね。このように、行政機関と民間機関とのネットワーク化の動きは進んできています。

篠藤　その整理をして、ネットワーク化しようという主体は何でしょうか。確かに、給付行政として、こうした環境もサービスとして国家が関与するという議論も可能だと思いますが、本来の「生涯学習」という概念、教育学が取り上げるべき「生涯学習」の概念と国家政策の対象としての「生涯学習」の概念は違うという気がしています。教育学者が「生涯学習はどういう位置付けになるか」と言うのはいいが、どうも政策用語が教育学的概念として言われている。用語の分類としては、全然だめじゃないかと思う。

瀬戸口　「生涯学習」は、概念理解よりも、政策先行だと思いますね。概念自体考え出すと、大変難しい問題になるんじゃないですか。生涯学習の歴史の中で、「人間的であり続けるための方法は、学習を続けることである」と言った人がいます。この場合の「学習」とは、要するに「教養」ですね。このように、生涯学習には、「人間が本当に自分の求める学問をしている時に自分らしくなれるのであれば、学習の機会を保障すべきてある」ということから始まった面もあるんです。そこに人づくり政策的な側面などが絡んできて、どんどん様相が変化していっているんじゃないでしょうか。いつの間にか政策的なものばかりが押し出されてしまったのでは…。

Ⅱ 生涯学習の中身

秋田　そもそも、このテーマを設定したのは。

松田　私自身の興味関心は、どちらかというと内容、生涯教育で何を教育するかとか、何を目指すか、という面です。それが地域が求めているものかどうかと疑問であり、公開講座や大分キャンパスの英語科で子供の英会話教室をするなど、生涯学習の取り組みが行われていることがわかりますが、その内容はどのように決定すべきか疑問です。

秋田　確か生涯学習で一本書いているはずだけれど[1]。6、7年前かな。(原稿を見つけに)

篠藤　大学として税金をもらっているわけですか

[1]秋田清（1999）「地域と大学―いわゆる生涯教育をめぐって―」『別府大学短期大学部紀要』第18号

ら国立大だったら決定的に地域社会のために何かを提供する必要があるでしょうし、私立でももらっていますので、しなければいけないのでしょう。

ただ、もう一回僕がひっかかっていることを言いますと、学習社会、人は学びたい気持ちを持っているということはわかりました。それを社会がさまざまに提供する、そのような社会はいいと思います。ですが、例えばある宗教団体が盛んに教育をしている、宗教教育ですが、それは生涯学習としてもとても価値があると思うのですが、それを国家がどうのこうのということはないと思うんですね。というかやばい分野もたくさんあってですね、国家が関われない分野・関わっちゃいけない分野、…思想・信条など人間の内面の分野は国家が関われないと思うんですけどね。このように国家は生涯学習のある分野は絶対できないという緊張感はないんですか。

秋田　「生涯学習」などと叫んでいる人たちにはないでしょうね。そして、当然、国家と対立せざるを得ないようなものになるとは思うんですよ。ただ、さっき瀬戸口さんが言っていることってきれいごととして言われているだけで、中身まで深く考えられていませんよ。一般論を一般論として言っているだけです。生涯学習社会といわれ始めて、それは何と対立しているんだろうと考えたら、「学校教育社会」と対立しているだろう、と私は思います。要するにこれまでの教育全体を問い直す、それは単純に言えば、知というもののあり方について根源から考え直すということで、そういう目的でこれまでの教育全般・教育システムそのものを問い直す、という志を持つならば「生涯学習社会」という言葉を使ってもよろしいと、むかし書いたわけなんだけれども。

篠藤　きちっと言葉を吟味し使用しなければ、どうも錯綜してわからなくなる。だからむしろ露骨に対立するイメージを作って、「私は文科省の偽善的生涯学習論を排して、本当の生涯学習を」というような議論はないのですか。

瀬戸口　というか、現状として、今本当に一般の人々が学びたいと思っているのは、政治的内容よりも、趣味・教養的な内容が多いということは統計的にも確かなわけです。低コストで社交ダンス、絵画などの習い事をいつでもどこでも好きなときにできる、そういう施設や設備を用意することが生涯学習社会に近づくことの一歩だという考えは前からあるにしても、今言われたような、生涯学習の偽善性まで議論されてきたかどうかはわかりません。

秋田　いや、ないと思いますよ。

瀬戸口　現在の生涯学習で問題となることは、例えば「地域住民の多様な学習ニーズにいかに対応すべきか」というようなことなんです。流行がすごく激しくて、カルチャー・センターからしてみれば、いかに消費者のニーズを掴んで提供できるかということになります。

大嶋　それは商売のためでしょう。なんでカルチャー・センターが存続しなければいけないか、人々が喜ぶ習い事を効率よく安価に用意するのは何のためであるのかとか、それが国家の役割なのか。

篠藤　これは秋田先生の時代だったら、国家が国民を統合するための支配者の一方的な運動だろう、国民を手なずけて飴玉しゃぶらせておとなしくさせて、次の労働力としてなだめるための手段にしようと激しく批判されていましたね。

松田　今、言われて気づくという感じですね。

大嶋　じゃ、松田さん自体が中身とか目的に興味があるということは、中身から行くんだったら「何のために」という議論になるんじゃないですか。

松田　私自身は正直に言って「学ぶことは人間にとっていいことだ」と言われたら、わりとすぐに納得してしまいますね。それから「誰でもキャリア・アップできる機会を与えられる社会」というのも、基本的にいいものだと思います。ところで以前、北九州市などの男女共同参画社会関係のHPを見て、「ジェンダー論」「女性の社会進出」などの講座がたくさん入っているのに驚きました。そこでそれらの講座の内容について、今までは、そこに国家統制があるんじゃないかという発想はありませんでしたね。

秋田　議論でもシンポジウムでも、どんな立場で

[2]冨吉素子氏（同大同学部人間関係学科教授）。2003年12月に別府大学公開講座「ジェンダー論」のパネリスト。

ものを言う人でもいいんですが、「これしか信じられない」「これしかない」いう人の話を聞いても面白くない。たとえば、ジェンダー論の話が学内であって、冨吉[2]さんが言っているような「女らしさ、男らしさがあってもいいんじゃない」みたいな話はジェンダー論をやっている人の間では絶対に通らない。そりゃもう犯罪者みたいな扱いをされて。対するアンチ・ジェンダー論の人の話も、「女は女らしく、男は男らしく」で、他の人の立場を認めない。その時その時で、人間にとって学ぶとは知とは何かということを問いながら、そこを出発点として教育のシステムまで考えていこうとするのが教育学者の義務だと思うんだけどね。それで、100%満足な社会なんてものは永遠に作り得ないけれども、その時その時でよりいいものを作っていこうということだと思う。社会全体を改革していく、それとの関わりの中で教育から出発して少しずつ社会をいいものへ変化させていこうとせざるを得ないでしょう。そういう風に社会を少しでも変えていこうという風にならないものって、僕はあんまり意味がないと思う。

イデオロギー論争がかつてのように盛んではなくなった今は、少しまともに議論できるような素地はできたと思う。だから、学校教育とかいろいろなシステムを一度取っ払って、地域社会の中でその一員として活動していること自体に意味があり、それ以外の才能が花開いたりするのは2次的なものだ、なんかそんな風に捉えなおして、知の伝達とか知の開発についてもう一度考え直してみたらどうだろうか、とそこに書いたんだけれどもね。

「生涯学習社会」の目指すところ

瀬戸口　生涯学習社会というものが、どれだけ理想的な社会か考える一つの手立てとして、極端な話、学校をなくしたら、代わりにどんな形態があり得るのかと考えた方が分かり易いのではないでしょうか。「脱学校論」を唱えたイリッチは、たとえば公民館とか図書館などの施設に教育内容を保管しておき、自己の教育資源や指導者や学習仲間も登録制にしておいて、いつでも施設に行って組織的に学べるようなネットワークを作ったらどうかと提案しています。これもひとつの生涯学習社会のモデルになっているかと思います。

秋田　実際には理想像みたいなものが出て、それがそのまま実現しないにしてもいいと思います。フランスでは、両親のうちのどちらかが大学を卒業していれば、義務教育は親が教育しても良いとされていましたよね。

大嶋　今は条件が変わっているかもしれませんが。

秋田　どちらにしても、そのように何かで補完していったり、拡大していくというのが、現実的だと思いますね。

瀬戸口　学校が制度として確立する以前は、地域で教育していたわけです。もちろん、そこまで戻せないにしても、地域を基盤にして、今後新しい家庭や学校の学習ネットワークの在り方を考えなきゃいけないってことはあるかもしれませんね。

秋田　私が中学生のころまで、「百姓の子供に教育はいらん」とか言っていた親がいましたね。あれ、とても好きですね。学校には知の伝達がない。さっき篠藤さんが国家による統合って言ったけど、誰にどう統合されてしまうかわからない。生涯教育って言ってみたら結構みんなが乗ってきて、「これ成功！」という感じ。生涯教育って言えば、誰も反対できない、いいことだという空気がある。

瀬戸口　結局、上から下へ上意下達で降りてきているだけだから、下の方から求めて変わっていかないと、本来の意味での生涯学習にはならないですね。やはり政策的に都合のいいようにやっているだけだから、方向が定まっていないような感じですね。

篠藤　どうも生涯学習という大層なものを使いながら、ファッションのようなものにすり替えておいて、それに対して何の問いかけもない、疑問もないという言葉の使い方に対してすごく腹が立っています。ヨーロッパで国民国家ができる場合、一番大きな問題は宗教教育の対立ですよね。国家を超えたカトリックの問題ですよね。カトリックは未だに独特の法律を持ち、魂を支配するようなものを延々と作っているわけです。従って、宗教、つまり、魂の分野に国家は入って来れない形で妥協しなければならない。でも、宗教活動や教育は、人間の人生そのものを築くという意味で「生涯教育」の最たるものではないでしょうか。

松田　生涯学習の大学ができているんですよね。生涯学習を大学で勉強する…通信教育で、人の一生や教育について勉強するようです。また、通常の大学の中にも生涯学習のコースがあります。このようなものを見ていると、だんだんわからなくなるんですよね。大学と対立するものとして生涯教育があると思っていたのですが、大学の教育内容が生涯学習の内容だとはどういうことかと思ったわけです。

瀬戸口　まず、生涯教育という中で、大学の中で本当に生涯教育する必要があるのかということですね。これもまた問題になるし、するとしたらどういう形でできるのかという問題ですね。

松田　ひとつは大学が、さっきも発言があったように、18歳人口が減ったから、大学の中に間借りしているという感覚なのかもしれません。

大嶋　大学がニーズを掘り起こして、本来若者に充てていたエネルギーを違う対象に振り向け始めた。それはどうしてかというと、組織の維持のためで、今それをやっているという認識で、じゃ、どうしたらいいかと考えていかなければいけない。

松田　今日はそういう方向で話しが進むと思っていましたが、前提のところでお話がいろいろありました。

大嶋　前提を踏まえた上であれば、じゃあ何をするかと考えればいいと思います。

瀬戸口　ある大学では、社会人の大学院を作ったら、非常に好評だということを聞きました。志願者がたくさん集まって、先生方が「安泰だ…」と(笑)。そういう手もあるなと思いました。

大嶋　やっぱり人がたくさん来て、何を教えるか考えて、来た人が面白いって思うことがあることが「安泰」って言わせるんでしょうね。

秋田　今の学生が講義を聞かんようになっているから、聞いてくれてうれしいっていうことでしょうね。

大嶋　噛み合っている感じ。

瀬戸口　もし別府大学が生涯教育の場を与えるとしたら、夜間大学院でしょうか。それとか、公開講座、地域との交流の機会を作るとか…。

松田　地域の人たちに教育の機会を与えることは確かにいいことだとは思いますが、それだけでは、こちらとしては元気がでませんね。

秋田　いや、以前、生涯学習のシンポジウムで発言したのですが、「生涯学習、生涯学習と言って、すばらしいことがあるようにみんなが来て集まっているけど、学ばない自由もあるんですよ」って言ったんですよ（笑)。私は「生涯学習おばさん」って呼んでいるんですけど、生涯学習の「追っかけ」みたいなおばさん達いるでしょう。「生涯学習」といえば、参加しないのは遅れている、意識の低い人みたいに考える人たち、あれで、日の丸の鉢巻して、襷をかけたら、立派に「国防婦人会」ですよ。

瀬戸口　結局、「生涯学習」ということで、地域に発信しても、参加する人は決まってくるんですよね。

大嶋　それでいいじゃないって思うけど。ニーズを掘りこさなきゃならなくなったら、またその時にニーズを探ればいいわけで。

秋田　うん、何かやった後でどうでしたかとアンケートをとるのはいいけれど、先に何が聞きたいかという調査をして、その結果に合わせる必要はないと思う。それよりも自分が何を教えたいか、何を話したいかが問題であって、それを聞きたい人が来るというのでいい。人が来なければ…（笑）

松田　ああ、来ないなぁって（笑)。

秋田　学生は単位を取らなきゃならないから、半ば義務的に聞きに来ているけど、その人たちはそういうことじゃなくて、楽しみたいから来ている。寄席でも、音楽でも何でもいいんですよ。その時間を楽しみたいから来ているんで、私はそれをあんまり馬鹿にしたらいかんと思いますね。

瀬戸口　篠藤先生がおっしゃったように、（生涯学習の場から）何かの市民運動に発展することもあってもいいんでしょうけれども、純粋に趣味として楽しみたいとか、あるいは大学の授業を受けてみたいとか、本当にいろいろあるわけですから、それを生涯教育・生涯学習であるといって一律にくくってしまって、政策的に考えていくこと自体が無理かもしれませんね。

秋田　あんまり使いたくない言葉ですね。批判的に使うことはあっても、「生涯学習をやりましょう」って言わないな（笑)。

瀬戸口　やっている人には、そういう自覚はないと思うんですね。好きなことをやっているわけですから。

大嶋　講師の人も「これが生涯学習だ」と思って教えているわけじゃない。

秋田　我々が地域でいろいろなことをやっているじゃないですか。篠藤さんと私があちこちで露骨に批判をしたり、地域の人にとって突拍子もないことを言ってみたり。たとえば、私がやっている地域通貨の勉強会とか、あれは生涯学習とか言いたければ生涯学習ですよね。地域の運動との関わりで地域社会研究センターなんかがやっていることが、あえて生涯学習をやってくださいということになれば、そこに置いておけばいいことでね。

松田　お話を伺っていると、「教わりたい人がそこにいる限り」という態度でいればいいんだと私には思えてきました。今回のテーマを立てたこと自体が、少し的外れだったかもしれません。

秋田　いやいや、そんなことはないよ。

松田　生涯教育・生涯学習の用語などにしても、わかっているつもりでいて実はよくわかっていないことがたくさんあるなと思います。公開講座のやり方もお仕着せのように感じられて、やる側としてちょっと苦しい思いがあって、これでいいのかと思ったんです。でも、教師が話したいことを話して、聞きたい人が聞きに来るという捉え方をすれば、これでいいのかな。

Ⅳ 学び方のスタイル

秋田　あれは政策的にやろうとしていることだけれども、行政がカルチャー・センターまがいのことをやっているでしょう。東京都立大学の文学の先生方が改革によって、都民カレッジに移籍するという話があったでしょう。あれ、私はいいことだと思うんだけど。

松田　大学教員にとっては、非常に嫌な話だと思います。大学には、そこへ行けば非常にいい話が聞けて、日ごろ疑問に思っていることがすっとわかって、頭がすっきりするような、いいイメージがある。都民カレッジにはそこまでいいイメージはない。そこへ行かされるというのは…。

大嶋　その虚像をどこまで維持できるか…。

秋田　もう、無理でしょう（笑）。

瀬戸口　放送大学というのがありますよね。あれはどの程度機能しているんでしょうか。

松田　大分の放送大学は盛況で、事務局の方が威張っていましたよ（笑）。

瀬戸口　放送大学へ入学してほとんどの人が学位を取っているんですか。

松田　市役所などに勤めている方が多いそうです。その一方で、最終学歴が大学院の人で自分の好きな科目だけ取っている方もいるそうです。でも、キャリア・アップが中心でしょうね。

大嶋　ひと昔前に福祉・教育関係を調べましたけど、将来の出世や年金のためのキャリア・アップを目的にした人が大半を占めていましたね。そういう人たちにニーズがありますね。先ほどの篠藤先生が分けられたので言えば、労働市場で自分を高く売るための学びですね。それでも、テレビやラジオで勉強するのは、面白くはないでしょうね。確かに第一線の方たちが出ているけれども、学問的なレベルの高さと聴衆の満足度の間には隔たりがあるでしょうから。

秋田　大学がやるということに意味があるんなら、来ている人たちが実行委員会を作って、そこに大学の先生が一人くらい入ってやったらどうかな。大分キャンパスでやったときには、講師を外に求めてやったらものすごく特徴的だって好評で、文部省が何年も補助金をくれた。もっと古い話では、大学生時代には自治会で土曜日の夜にやってた。大学の知を外に広げようという多少民主的な先生たちを中心にして、お金も取らなかった。近所の人が来ていたな。学内の人も来ていたし。

篠藤　大学の公開講座が地域での「生涯学習」にどのくらい意味があるのかという点で、私は多少批判的です。私は昨日も竹瓦[3]にいて夜の12時近くまでいたんですけど、ああいうのが大変好きなんです。あそこで僕は特に語るわけじゃないけど、本当に面白い。あそこにいるおばさんの話がすごく勉強になる。いろいろな職業の人が来て、あそこでなきゃ聞けない話がたくさんある。昔遊郭を経営していた人が、湯治のことをいろいろ話してくれる。するとみんな「へぇっ」となる。それからラブホテルのバリアフリーの話が出て、身体障

[3] 別府市の中心市街地にある竹瓦温泉の周辺。

害者の性の悩みを披露したり…（笑）。皆それぞれ特別な知識と体験を持っているわけでしょう。その人たちの話に耳を傾けることで知的好奇心がすごく刺激されて、「今日来て良かったなー」ってね。

松田　私はそういう話を聞くと、本当に悩んでしまうんですけれど、じゃあ大学にその遊郭のおかみさんに来てもらって、みんなの前で話せばいいかというと、それでは成り立たないんではないかと思うんです。

秋田　いや、そういう人がね、一週間に3回くらいこの部屋に来ればね。

篠藤　竹瓦での会話は実はとても幅広いものですが、ただ、こうした一般的に言うと「非教育的な」話題も排除しないと言いたかったわけです。北野武の「座頭市」を見に行きましたが、タップダンスがあったり、パッパッパッパときれいな色のネオンが光ったり、ものすごくヨーロッパでは受けるなと思ったんですね。あれは、武が浅草ロック座のストリップ小屋の雑多な中で生きて、そこに江戸芸を伝える小粋な奴がいて、コリャなんて言っている。そういう雑多な中で、武の感性が研ぎ澄まされていったと思う。これを文化と言わずして、何を文化というか。…暴論ですか。

松田　暴論とは思いませんが、学校教育とは対立するものだという気がします。

篠藤　文学の世界を例にとると、夏目漱石を読むとします。夏目漱石が執筆していて神経症になったように、それを研究する者が神経症になる位じゃないと夏目漱石の文学を読んだと言えないのではないか。作者についての情報をいくら知っていても、それは作品や作家に本当は出会ってないんです。この作者が何年に生まれてこの作品は何年に書かれたということばかり言っている人が文化と関係があるなんてとんでもないですよ。

松田　大学生活には講義もあれば飲み会もあって、研究室での会話も含まれていると思いますが、それらは私の中ではどうなっているのか。…文化には裏表があるという感じ。

篠藤　僕はいい学生じゃなかったけど、大学時代、「財とは…モノかな？」と言って帰ってしまった西部邁とか、ああいう先生の授業の後、すぐに彼の著作を買いに走ったりした。とにかく凄まじい刺激があった。東洋史の西嶋定先生が史学概論で「一日一個アイデアが無い人には学問のセンスが無いから、研究者になるのはやめなさい」と言われて驚いた。

瀬戸口　篠藤先生はそういうところでずっと学んできて、先生なりの学び方のスタイルをもう持っているからじゃありませんか。

篠藤　僕は、そういう傾向が多分に強い人間だからっていうのは事実ですけどね（笑）。

瀬戸口　でも、普通の人は高校ぐらいまで出て、大学行って、…学び方のスタイルって人それぞれあると思うんですよね。実際には自分の学び方のスタイルがよくわからない人が多いんですが、篠藤先生はそれをよくわかっていらっしゃる。

松田　確かに、文学は本音と建前で言えば本音の部分に訴えてくるものだと思います。

大嶋　そうね、人間を描いていると思います。

松田　でも、今の学校教育ではどのように教えているのでしょう。濡れ場であったり、差別する心であったりを感じていかなきゃいけないけれども、教育現場はどんな風になっているのか疑問に思いますね。差別しちゃいけないという道徳のために文学が使われるのはおかしいと思うし、そう考えるとさっき言ったことと矛盾しているかな…（笑）。

篠藤　笑っちゃだめですね。

秋田　ここの研究室の常連は、「サロン岸」にたむろしているような人たちがここに来ていたとしても、一瞬驚くかもしれないけど、そのうち溶け込むと思うな。僕はサロンみたいな今の研究室の雰囲気が好きで、最近は講義も同じようにしようと思って去年の後半からやってみたんですよ。そうしたら、それ以降の方が皆よく聞くし、感動する。

篠藤・大嶋　ほう。

秋田　講義の時間でできるって、その時教員が話したことについてでも何でもいいんだけど、ちょっと勉強してみようかなと思えるかどうか、本屋に走るとか、そういう刺激を与えられるかどうかだけなんじゃないかな。昔から言われていたように、知識は盗むべきものだと思うんですよ。じゃ、今の学生が何故それをしなくなったかというと、教える側がそれを期待していないからだと思いますよ。ある必修科目を他の科目で読み替えて卒業させようとしたりしているけど、あれは自分たち

の必修とした科目を大事だと思っていないからそういうことができるんですよ。社会の評価じゃなくて、自分自身の気持ちとしてそうなっている。教員の堕落以外の何物でもない。

技術の方で言えば、寝たきりの老人を起こすための技術を、筑波大学かなんかで考えているというテレビ番組を見て、非常に感動しましたけど、何で伝わってくるかというと、（研究している）本人が一生懸命そういうものを開発しようとして、よそからいろんなことを学んできてやっている。本人が学んでいるから、人々に伝わるものがある。大学の教員の中には自分も学んでないから、学生にも簡単に単位をやろう、というもたれ合いがある。

篠藤　竹瓦なんか「いいな」と思うとすぐ学生を連れて行くんですけど、だめで…。ひとつ残念だなと思うのは、うちの学生を見ていると、心がすごく硬いなっていうか、勉強ってすごく面白くないものとして詰め込まれている感じが非常にします。

松田　…しますね。

篠藤　別府で市民が始めた「路地裏散歩」に学生を参加させていますが、感想に「アイスキャンディーの棒が斜めに刺さっている」なんて書いてあって、僕は「あぁ、教育効果が出たな」と思っていたら、そのうち「資格を取らなきゃ」なんていい始めます。資格は良いんですが、こうした生き生きした好奇心を育てることが中心だと僕は考えていましたので、大変残念な気がしました。

松田　私も感じますね。講義の中での学生とのやり取りがとても難しいです。なんで、硬くなってしまったんでしょうね。就職難も関係があると思うのですが。

篠藤　学ぶとか教えられるという信仰が人をだめにしていると思います。そういう意味では、すごく教育化された人たちだと思いますね。「落ちこぼれた」という意識は、教育されるものという前提があるからこそ、そこから落ちこぼれたわけでしょう。昔、地域の力って言っていて、「あいつは勉強はできるけど、喧嘩は弱ぇ～」ってことがよくあったでしょう。学校が全てではなかったのに、今は親からしてどこかの本に書いてあることを信じて、それを基準にしている。そういう屁みたいなものがすごく普及していて、社会に出たら本当に役に立たないと思います。

大嶋　学ぶのはいいことだっていう、学校なんか行ってもしょうがないっていう…。

松田　生涯教育を受け続けて、一生、逆転のチャンスを狙う人が出てきますね。

大嶋　今大学院を立ち上げていてすごく思うんですが、臨床心理学に来る人にそういう逆転のチャンスを狙って来る人が本当に多い。いろいろな職業を経て、キャリア・アップしてきていてすごいなと思う一方、学ぶ姿勢がものすごく硬くて、こちらが言うことが入っていかないのを感じます。もう少し柔らかくならないのかな。

松田　今日は、生涯教育と生涯学習の違いということを皮切りに、「生涯学習社会」として目指しているものは何か、そして大学での学び方のスタイルというところまで話が及びました。名称の変遷や内外の教育との比較をもとに説明していただいたり、私自身が学校教育の持つ型にかなり拘っていると自覚できたりと、大変面白い議論が展開しました。どうもありがとうございました。

平成16年２月27日(金)午後３時～５時半　秋田研究室にて。